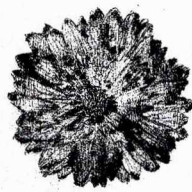
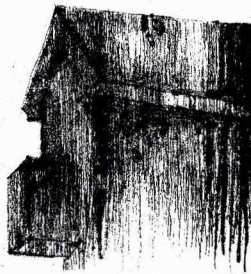


朝日 歌壇 俳壇



〈ガーベラと2階のベランダ〉

岩尾恵都子



俳句時評 文人俳句の自由さ

岸本 尚毅

「文人俳句」とは、小説家などの文人が余技で詠む俳句のこと。漱石、荷風、龍之介、屋島などが知られる。当代では川上弘美が二冊目の句集『王将の前で待つて』(集英社)を刊行した。

求雪女郎初心可細面年不問
雪女に扮する人の募集か。酔狂な人が本物の雪女を募集していると解しても楽しい。「年不問」に可笑しみが漂う。

引込線ゆけば花野に終はりけり
引込線の線路を辿ると、秋の草花が咲

く花野で途切れた。川上には、叔父の幽霊と花野で会う「花野」という短篇がある。花野に至る謎の引込線は、小説「花野」の世界を思わせる。

春しぐれ釈迦も芭蕉も腹くだし
これも異色作。仏陀も俳聖芭蕉も腹くだして死んだ。春の時雨が情けない。

余技ゆえの余裕が文人俳句の魅力だといわれるが、川上の句は、その小説と同様の特異な発想が読者の意表を突く。

奇想に遊ぶといえは、大木あまりもその中に生き続けている。

うだ。近刊の『山猫座』(ふらんす堂)にこんな句がある。

暖簾くぐるごとく柳の中へ入る
暖簾のような枝をくぐって柳に入る人影。「遊行柳」の柳の精だろう。

大木には詩画集の著作もあり、その句には文人的な雰囲気がある。

猫の蚤を飛ばして柚子日和
柚子の熟れた秋の明るい日、座敷で猫の蚤を観察する。その浮世離れした趣は文人俳句にも通じるものだ。

「文人俳句」というと往年の文豪を連想するが、文人的な自由さは現代の作者の中に生き続けている。

◆馬場あき子さんの選歌は今回で終わります。

第25回現代俳句大賞 現代俳句協会主催。東京都の俳人・中村和弘さん(83)に決まった。人間探求派の流れを「陸」主宰として継承し、現代俳句を意識しながら骨格の強い文体を追求したことが受賞理由。2018年に同協会の会長に就任し、在任6年の間に赤字脱却や法人化を成し遂げたことも評価された。

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。

長谷川 權選

肉塊の如き雲ゆく春は来ぬ (さぬき市) 鈴木 幸江
☆アメリカのゆすりたかりや牙返る (青森市) 小山内豊彦
アフリカのイブが母なり花ミモザ (太田市) 岡島由美子
熊野川三千余峰山笑ふ (新宮市) 中西 洋
さばかれて花になりけり桜鯛 (長崎県波佐見町) 川辺 酸模
大陸にむかし孔孟羅れり (川越市) 渡邊 隆
春愁や考へる葦橋の中 (茨城県阿見町) 鬼形のふゆき
新妻としほむすび食ひ白魚波む (津市) 中山 道治
ただいまととき夫の声花の闇 (日南市) 宮田 隆雄
卒業の決まれば授業もう聞かず (川崎市 折戸 洋

【評】一席。さまざまな形の雲。大空も春たけなわ。二席。品がないゆえに票が集まる現代社会の矛盾。あと三年九カ月も。三席。はるかな昔、一人のイブから人類蔓延。嘆きの聖母か。十句目。この気風やよし。ただし勉強は自分でするもの。

大串 章選

村十戸老いの総出の野焼きかな (岡崎市) 澤 博史
うららかなや詩心ひとり歩きする (大崎市) 水野 公子
見失ふまで風船を見てゐたり (朝倉市) 深町 明
凛冽の梅満つ被爆八十年 (山梨県市川三郷町) 笠井 彰
月光の練り込まれたる春の泥 (東京都足立区) 望月 清彦
父母逝きて空家の庭に春の雪 (相模原市) はやし 央
受験子の祖父を気遣ふメールかな (高松市) 井口 直美
啓蟄や故郷出でて七十年 (埼玉県宮代町) 鈴木 清三
山吹や面影さがす同窓会 (坂戸市) 安留 誠一
鳥帰る見えているはず空の道 (さいたま市) 岡村恵美子

【評】第1句。野焼きの跡には新草が芽生え、野は生き生きと蘇る。「老いの総出」が頼もしい。第2句。こうして素晴らしい詩が生まれる。知恵者ぶって「詩心」を束縛してはならない。第3句。風船は作者に何を残して飛んで行ったのか。

高山れおな選

訳も無き老いの涙目亀鳴けり (柏市) 藤嶋 務
鮮やかに羽を広げし鳥の恋 (相模原市) はやし 央
春風のなかで春風めく寝息 (アメリカ) ケビン バロール
春落葉踏まずに行けぬ老いの道 (筑紫野市) 二宮 正博
焼ける日本目に焼き付けて鳥帰る (太田市) 堀越 伴之
私っていい子じゃないわチュリッ (成田市) かとうゆみ
帰り来し子に野焼の香してゐたり (尾張旭市) 古賀勇理央
猫の子も鬼の子もある子ども食堂 (東京都葛飾区) 福島 隆史
春めきて昭和百年野の光 (鹿角市) 北村 孝子
トランプの不確実性猫の恋 (海南市) 楠木たけし

【評】藤嶋さん。涙目の老人と鳴く亀と。訳が無い者同士の訳の無い出会い。はやしさん。「鳥の恋」は鳴き声をイメージさせるのが普通。こんなヴィジュアルな形象は珍しい。ケビンさん。強度のバイアスがかかった「春風めく」。原因は愛。

小林 貴子選

三月の海へ名を呼び立ちつくす (いわき市) 佐藤 朱夏
面白や春一番のやうな夫と (尼崎市) 小石 絹子
女性デー紙面に映ゆるミモザ色 (岡山市) 内田 一正
炒めれば落の姑まだいける (熊谷市) 松葉 哲也
菱餅の台や菱餅のみ載する (佐倉市) 葛西 茂美
リク・リュウのように泳げる二羽の鴨 (東京都豊島区) 酒井 月子
青き踏む青き地球と思ひつつ (川西市) 糸賀 千代
ぐずぐずとするが楽しみ春炬燵 (高岡市) 武内 徹
☆アメリカのゆすりたかりや牙返る (青森市) 小山内豊彦
けちやつぶではとかけりおむらいす (横浜市) 座間 敏正

【評】一句目。大震災で失われた命、愛しきその名を今年も呼ぶ。二句目。春一番のような人とは、威勢が良い。三句目。三月八日、ミモザ色の朝日新聞に目を引かれた。四句目。落の葉が育ち伸びた状態を「落のしゅうとめ」と呼ぶ地域あり。